場所は黒海のクリミア半島（現ウクライナ領,当時はソ連領,）にあるヤルタ近郊にあるリヴァディア宮殿（1911 年ニコライ 2 世の保養の宮殿として建てた。現在はヤルタ会談記念博物館として一般公開されている）

クリミア半島について考察すると、1475 年オスマン帝国に征服され、オスマン帝国の属領、クリミア・ハン国となり、

1853 ～ 1856 年、クリミア戦争、フランス、オスマントルコ、イギリスを中心とした同盟軍とサルデーニャ（イタリアにあった王国）とロシアとが組んで戦争をした。戦場はクリミア半島ばかりではなく、ウィーン体制が崩壊し始めたことにより民族、宗教等利害関係が複雑に絡み合い多くの民族、異教との戦いとなり広範囲の地域で戦われた。イギリス人の看護婦ナイチンゲールはイギリス軍の従軍看護婦を志願し、戦場で負傷者の看護にあったが、敵味方なく傷病兵の看護に当たり、「クリミアの天使」と呼ばれたが、後に「白衣の天使」と呼ばれ世界的に定着した言葉になった。

1877 ～ 1878 年露土戦争：ロシア帝国（露西亜）とオスマン帝国トルコ（土耳古）

バルカン半島に在住するオスマン帝国領下のスラブ系諸民族がトルコ人の支配に対して反乱を起こし、それを支援するかたちでロシアが介入して戦争になったが、ロシアが勝利した。表面はスラブ系諸民族の支援としたがロシア帝国の本音は、地中海への通路の確保であり、不凍港獲得の南下政策の一貫であるから勝利と同時にクリミア半島を含むこの地域全てを支配地にしてしまった。

黒海に突き出たクリミア半島は地中海性気候に包まれた温暖な地であり、極寒のロシア大地からみれば最高の保養地となる。そのため 20 世紀にはロシア貴族や政府高官はこの地に保養のための宮殿や別荘を持つた。

出典：
アルチュール・コント著
山口俊章訳

『ヤルタ会談
世界の分割
―戦後体制を決めた
８日間の記録』

サイマル出版会
１９８６年３月発行

訳者まえがき
第２頁～第３頁

このような地を撰んで会談の地としたスターリン首相の意図は何だんったのか。戦争を重ねることによって奪い取ったクルミアで会談を持つことは、第二次大戦でも大いに領土を拡張するぞとの宣言だったのか、あるいは単に保養地として撰んだのかは不明だが、結果的にはスターリンの一方的な支配地獲得になってしまった。　特にこの会談に臨んだアメリカ・ルーズベルト大統領は 1912 年、ポリオに罹り、その後遺症により下半身が麻痺し日常生活は車椅子の生活であった。（近年の研究ではギラン・バレー症候群の症状と整合性が高いと発表された）

ヤルタ会談から帰国後僅か 3 ヶ月後の 1945 年 4 月 12 日、ホワイトハウス大統領執務室で午前中　脳卒中で倒れ、死去した。

ルーズベルト大統領の急死に関し、戦後しばらくして真偽のほどは定かではないが、ある風評があった。それはスターリンが故意に操作した姿なき殺人ではなかっ